

中・近世の大和における墓地景観の変遷とその意味 白石太一郎

Changes in the Appearance of Graveyards in Yamato in the Medieval and Early Modern Periods

はじめに

- ①中山念仏寺墓地における墓地利用形態とその変化
- ②平岡極楽寺墓地における墓地利用形態とその変化
- ③その他の国中の郷墓における墓地の利用形態
- ④宇陀地域における一統墓から村落墓地へ
- ⑤中世墓地から近世墓地への転換
- むすび

【論文構成】

小論は、歴博の基幹研究「地域社会における基層信仰の歴史的研究」に関連して実施した奈良県の中世以来現在まで利用が続く墓地の調査成果に基づいて、中・近世の大和における墓地の利用形態の変遷、すなわち墓地景観の変遷過程とその意味を考察したものである。

奈良盆地では、現在も複数の大字、すなわち近世村が墓郷を形成し、大規模な共同墓地である「郷墓」を営む場合が多い。その多くは墓地としては中世の中頃までには成立しており、中世後半には五輪塔などの石塔が盛んに造立された。これらの郷墓では近世初頭以降、墓郷を構成する複数の村ごとに墓域を分割するとともに、遺骸埋葬地と石塔造立地を異なる両墓制的な墓地利用が行われたと想定される。

これに対し奈良盆地の東南方の宇陀地域では、墓地は現在も大字単位に営まれるのが基本であり、じく最近まで両墓制的慣行が行われていた。またこの地域は中世墓地の発掘調査例が多いが、それら発掘例では火葬ないし土葬の埋葬を行った上に石塔が立てられており、单墓制の墓地であった。それらの多くは在地武士層の一統墓であり、豈臣政権の支配の確立とともに廃絶したものと想定される。一方現在まで継続して利

用されている墓地は、ほとんどすべて近世に成立したものであり、中世から近世へ統く墓地はほとんど見いだせない。宇陀地域では、中世の在地武士層の血縁的な一統墓から近世の地縁的な村落墓地へと大きく転換しているのである。

盆地部の郷墓は宇陀の中世墓地とは異なり、すでに中世の段階から地域の共同墓地であった。おそらく平安時代には成立していたと想定される地域の葬地をもとに、一三世紀頃に律宗の僧侶などによって葬送祭祀のための講の組織化が進められて「物墓」となり、さらに新しく成立した近世村を基本的構成単位とする「郷墓」に変化したものと想定される。また盆地部でも宇陀でも、近世初頭前後に单墓制から両墓制へという大きな変化が共通してみられるが、これは遺骸の処理を村で行い、祖先祭祀のための石塔の造立を家で行うという矛盾が生み出したものにほかならない。

このように大和では、中世から近世にかけて墓地の景観自体が大きく変化している。こうした墓地景観の大きな変化は、宗教的・信仰的要因、血縁から地縁へという社会の大きな変化や家の成立といった社会的要因、さらに近世的支配の成立とそれとともに違う村の確立といった政治的要因などが複雑に作用した結果にほかならない。